

いつだったか、小学校高学年の生徒数人が「ちくさはいつごろできたん」と聞きにきたことがある。聞いてみるとちくさにいつごろ人が住みはじめ、どのようなくらしをしていたのかを調べているとのことだった。ちくさをふるさとにもつ誰もが疑問に感じてても良い質問であろう。

また、ある市の小学校の先生が四、五人の生徒をつれてやってきたことがある。

「昔の人は鉄をどのようにしてつくったのか」社会科の授業中にできた質問である。

鉄鉱石でなく「砂から鉄ができる」彼等には信じられなかった。本当にできるか、できんか自分たちでためしてみようときまり、千草鋼のことを聞き知って、はるばるやってきたのである。そして彼等は砂鉄や炭をもって帰り、運動場の片隅に炉をつくり実験した時の写真を送ってきている。

近年、タタラ製鉄のことで町を訪れ、タタラ跡やそこで働いていた人たちの墓、供養塔等を調査にくる人々がふえてきている。

前に一人の刀匠が、ちくさの文化財に関係している人たちや有志の協力で、ミニタタラ製鉄を復原してつくった鋼で、刀を鍛え寄贈してくれていることを知っておられる人もあるだろう。

そのように町内の子供たちが、あるいは他郷の人々が、私たちのふるさと千種に関心をもっているのに、ここでヘソの緒をきり、ここで生きてきた私たちが、ふるさとの歴史に無関心であって良いはずがない。

他民族、他国に亡ぼされ、復興し、他を征服し、あるいは又、征服されることをくり返してきた特に中近東の国々の人々は、自己を守り、自国の文化を大切に守っているということ聞いたことがある。

私たち日本人はただ一度の敗戦で、美しい精神的なものをなにもかも失ってしまったのだろうか。がむしやらに働くばかりで、人と人との美しいつながりを忘れてしまったのだろうか、と思える近ごろの風潮を悲しく思う。

年に一度だけ、ただみせかけばかりの九月十五日「敬老の日」。

そんな日もあつたんかいと、始めから忘れられたような「父の日」等々。

人情が厚いといわれた農山村でも、なんとギスギスした世の中になったのだらうと思わせることの多い昨今である。

ふるさとの人々が、いろいろな条件のもとにどのように生きてきたか、その歴史の足跡を知ることが、ただ昔をなつかしがる郷愁ではない

子供たちが、自分のふるさとの歴史を学ぶ。それによってふるさとをより身近にし、より自分を知り、確かめ、人間の生きざまを学ぶ眼をひろげる。

あるいは町出身の人で、他郷で働いている人たちがふるさとをしのび、心の支えやなぐさめを見出し、明日への活力が沸き出るように、あるいは町内の人々がよりちくさを愛し、より住みよい町づくりをするよすがとなるように、ふるさとの歴史の足跡を明らかにしたいと思ってきた。

五年程前、町史をつくる計画が町当局より打ちだされ、私たち六名の者が委託されたのであるが、浅学非才の上、それぞれ生業をもっていることなので、前述のような気負だけが先行するのみで、なかなかはかどらなく申し訳ないことと思っている。

その間、甚だ残念なことは、メンバーの一人平瀬進一氏を失い、五人になってしまった。

しかし、とにかく町内の元庄屋、総代持ちの古文書は勿論、三河、土方、波賀等の近隣や、かつてちくさと生活圈を同じくしていた鳥取県吉川、岡山県後山、大茅。

また江戸時代のある時期、生野代官支配になっていた関係で、再三、朝米郡生野町へも資料探しに行き、大変親切に協力いただいたり、御指導を得た。

深く感謝している次第である。

ちくさは山間僻地である土地柄、資料に乏しく、暦年を追って町史をつくることは不可能である。

役場移転の時にも、明治初中期の貴重な資料を焼いてしまっている。

しかし、私たちは資料のある限り、調査のできる限り、ここで生れ、ここで生きた人々の足跡を、できるだけ明らかにしてゆきたいと願っている。

このたび、町制施行二十周年記念事業の一として、町史のほんの一部を本にして各家庭へお届けすることになった。五名の者が、非才をかえりみず共同責任のもとに執筆し、皆さんの御叱正をおおぎ、今後の指針にしたいと思っ
ている次第である。

昭和五十五年一月吉日

井口二四雄

池田数夫

塚崎龍

鳥羽弘毅

日平閑次

五十音順